

栃木県鹿沼市立みなみ小学校

個の課題と特性に応じた指導をICTで実現

2011年4月、文部科学省が公表した「教育の情報化」¹では、2020年度に向けて実施する施策の1つに子ども1人1台の情報端末による教育を本格展開させることの検討を挙げた。一斉指導が中心の学校教育においてICTでどのような指導が可能となるのか。個別支援にICTを活用する事例を通して考える。

School Data



栃木県鹿沼市立みなみ小学校

◎ 1981(昭和56)年開校。心構えをつくる指導として、授業の始まりと終わりなどに「立腰タイム」を設け、正しい姿勢で黙想を行う。
校長 原田浩司先生 / 児童数 216人 / 学級数 11学級(うち特別支援学級5) / 所在地 〒322-0531 栃木県鹿沼市南上野町503 / TEL 0289-75-4021 / URL <http://www.school.kanuma.ed.jp/e-minami/>
*学校見学は随時受け付けています

鹿沼市立みなみ小学校では、月水金の朝、始業までの15分間を「パワーアップタイム」とし、国語や算数の基礎の定着を図るための自主学習に充てている。この日、読み書き・計算の基本に課題がある子どもも約40人は、図書室や空き教室に集まり、教職員の支援を受けながら課題に取り組んでいた(写真)。その内容は、一人ひとりで全く異なる。携帯型ゲーム機で漢字の書き順を学

ぶ子ども。今日の授業で扱う教科書の該当ページをデイジー(*)で聞きながら読む子ども。パソコン画面に表示された迷路の中を点滅する光を追っていたり、プリントにある2つの点を鉛筆で結んだり、視覚認知や筆圧の訓練をしている子どももいる。教職員は、その様子を確認しながら、「よく出来たね」「もう一度考えてごらん」などと声を掛ける。丸をもらうたびにうれし

そうに、すぐに次の課題に取り組む子どもたち。始業のチャイムが鳴ると、満足そうな顔をして自分の教室に戻っていった。

ICTの活用で学びにくさを排除

「泳げない人にくら『頑張れ』と言っても、浮き輪を投げ、泳ぎ方を教えないと溺れてしまう。学習も同じで、学べるように援助し、つまづきの原因を探って学び方を教えることが必要です」(原田浩司校長)

同校では、原田校長が5年前に着任して以来、子どもの個々の課題に応じた指導を目指し、多様な学びの場の整備や、指導法・教材の開発に積極的に取り組んできた。

発達障がいや自閉症などにより、特に学習に課題がある子どもは個別に支援する。毎年2月、児童観察や生育歴、スクリーニングテストなどを用いて、支援が必要な子ども一人ひとりの課題を明確にし、児童指導主任の荒川一志先生、竹之内崇先生を中心に次年度の支援計画を立てる。「漢字が苦手な子どもは視覚的に課題があったり、教師の説明が理解できないのはワーキングメモリーが低いためであったりします。学習を阻害する根本を探し出し、手立てを講じています」と荒川先生は話す。

支援ではプリント以外にパソコンや携帯型ゲーム機を活用する。子どもはゲームで遊んで育った世代であり、図や動画から直

* Digital Accessible Information SYstemの頭文字で「DAISY」。パソコンの画面上の文章を読み上げられるソフト。文節のまとまりに色が付くため、どこを読んでいるかが分かり、音声をまねて読む練習も出来る



鹿沼市立みなみ小学校校長

原田浩司

はらだ・こうじ 「担任の見取りと共に、私も子どもを観察して課題を把握し、支援の方向性を示すことを大切にしている」



鹿沼市立みなみ小学校

荒川一志

あらかわ・かずし 児童指導主任。「先生方との対話を大切にし、子どもの多様な面を共有するよう心掛ける」



鹿沼市立みなみ小学校

竹之内崇

たけのうち・たかし 特別支援教育コーディネーター。「子どもの言動には必ず理由がある。そこを掘り下げ、個々に合う指導をしていきたい」



写真 パワーアップタイムで子どもは自分の課題に応じた学習に取り組む。「支援が遅れば、それだけ課題が積み重なります。早期の支援を心掛け、良いと思われる方法を試します。もし成果がなければ、別の支援の方策を考えればよいのですから」(荒川先生)

感的に考え、理解することが得意だからだ。「子どもの興味を引きやすいデジタル教材は学習の取り掛かりに適していますし、課題に応じて作り替えがしやすいという利点があります。自力でデジタル教材を作るのは大変なので、インターネットでフリーソフトを探したり、市販のソフトを活用したりしています」(荒川先生)

ICTには、学びを阻害する環境を排除し、学習に集中させる効果もあるという。「筆圧が弱くても、タッチペンなら字を認識してくれますし、読むのが苦手でも、音読機能を使えば問題内容を聞いて理解できます。正誤もすぐに分かるので、学習がスピーディーに進み、たくさん正解したという達成感が、子どもを次の学習へと進ませ

ます。こうして自信を持つと、教科書とノートでの学習に戻っても自ら学んでいけるのです」と竹之内先生は説明する。

みんなが安心して学べる環境を整える

個別支援を進める基盤として学級づくりにも力を入れる。原田校長はこう強調する。

「個別支援は通常学級とは別の教室で行いますが、それについて差別的な発言があると、子どもは安心して学べません。他人を傷付ける行為は絶対に許さないと、私たちは毅然とした態度で臨んでいます。担任が指導しても改善しないなら児童指導主任が、それでもだめなら私が対応しています」

聞く態度も徹底的に育てる。自分の言葉を受け入れてもらえると感じることで、子どもは安心して発言できるからだ。例えば、教師の話をささぎって話そうとする子どもがいたら「今、先生が話しているよ。あなたの言いたいことは後で聞くね」と諭す。

こうした指導を粘り強く続けた結果、子どもは個別支援を特別視しなくなった。個別支援を受けた子どもが自信を付けて教室に戻り、学習に取り組む姿を見て、自ら支援を受けたいと申し出る子どもも現れた。教室に温かい雰囲気生まれ、学校では全く話せなかったのに朝の1分間スピーチを出来るようになった子どももいるという。「ある自閉症の子は書くことにこだわり

があり、ノートに書いては消しを繰り返して、学習が進まない状況にありました。そこで、パソコンでノートを取るようにしたところ、書く必要がなくなり、学習がスムーズに進むようになったのです。学力が上がれば、自信が付き、行事は通常学級と一緒に出来るようにもなりました。今は中学校でみんなと一緒に頑張っていると聞き、本當にうれしく思っています」(竹之内先生)

原田校長の着任時、問題行動に悩まされていた同校だが、今はそれも落ち着き、規律ある行動が見られるようになった。ICTが教育で担う役割は何か。そのヒントがみなみ小学校の取り組みにありそうだ。

これからの教育に生かせる視点

◎ 認知的な特性で課題をもつ子どもにとって全員一律の教材では理解が進まないばかりか、かえって学習が嫌になってしまいます。みなみ小学校ではICTを使い、視覚や聴覚を使った学び、ゲーム感覚の学びなど、一人ひとりの特性や能力に適した学びが集中できる環境で実践されていました。コンテンツや技術が更に発展すると、先生の主たる役割が子どもの状況に応じて力を伸ばすこと、「支援」となる可能性を強く感じました。

ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室
主任研究員 中垣眞紀